

#『妾の愛しい玩具(おとこ)——武蔵、信濃を差し出す』

一

重桜の夜は深く、月が雲間から覗くたび、武蔵の長い髪に紫の光が滑った。

執務室の隣室——今ではすっかり「妾の寝所」と化したこの和室で、武蔵は褥の上に片肘をつき、眼下の光景を愛でていた。指揮官が、武蔵の両脚のあいだに顔を埋めている。黒い軍服の背中が小刻みに上下するたび、くちゃ、くちゃ、と湿った音が夜気を濡らす。武蔵は細めた目の奥で、かつての彼を思い返していた。

初めてこの部屋に招き入れた夜のことを、武蔵は克明に憶えている。

あの頃の指揮官は、武蔵の着物の襟元を見るだけで耳まで赤く染め、太腿に手を触れさせるだけで指が震えていた。善良で、誠実で、だからこそ雌を知らぬ雄の弱々しさを全身に纏っていた。武蔵はそれを、雷霆が雨雲を散らすように、ひとつひとつ丁寧に解いてやったのだ。

「ふふ……」

武蔵の口元が、当時を思い出して自然に綻ぶ。あの夜、彼女が何をしたかといえば、至極単純なことだった。

指揮官の軍服を自らの手で脱がせ、ぎこちなく勃ち上がったばかりの彼のちんぽを、武蔵は自身のまんこの入り口にすりつけた。くちゅり、と蜜の音がして、指揮官の肩が跳ねた。その反応すら愛しく、武蔵は自らの指で秘裂を開き、彼の先端をぬぷりと咥え込んだのである。

「指揮官よ、妾を汝の玩具にするがよいわ」

耳元でそう囁いた時の、彼の困惑と、困惑の奥に灯った雄の本能の煌めき。武蔵はあの瞬間を、今でも鮮明に味わえる。彼は恐る恐る腰を動かし始め、やがて自分でも制御できない衝動に突き動かされるように、武蔵の膣を穿ち始めた。

あの最初の夜、指揮官は三分と保たなかった。武蔵の肉褰がぎゅうぎゅうと締めつけるたび、びくんびくんと背を震わせ、やがて「あっ……！」と短く叫んで、武蔵の胎内にあっけなく精を放ったのである。武蔵はその熱い迸りを子宮の入り口で受け止めながら、汗ばんだ彼の髪を撫でてやった。

「よく頑張ったわね、指揮官。されど、雌というものはな、一度の射精で満足するものではないのよ」

そう言って、武蔵はまだ萎えきらぬ彼のちんぽを自らの指で扱き始めた。くちくちと竿をしごき、先端から残った精液を絞り出す。指揮官は恥ずかしそうに顔を背けたが、そのちんぽは正直で、すぐにまた硬度を取り戻した。

「ほら、もう元気になったわ。雄とはそういうもの。さあ、次は妾がいくまで、汝のちんぽを妾のまんこから抜いてはならないよ」

これが武蔵の「教育」の始まりだった。

最初のうちは、指揮官はただ武蔵に言われるがまま、彼女の身体を借りて自慰をしているに過ぎなかった。武蔵の大きな乳房を揉み、武蔵のまんこにちんぽを挿れ、武蔵の胎内に精を吐き出す。それは彼にとって、武蔵という「玩具」を使った射精に過ぎなかった。

されど、武蔵はそれを否定しなかった。むしろ、その段階を積極的に肯定した。

「妾の身体は、汝の性欲を吐き出すための道具よ。妾のまんこは、汝の精子を受け止めるための器。妾の乳房は、汝の手を楽ませるための肉。存分に使いなさい。妾は壊れぬ」

そう教え込むことで、武蔵は指揮官から「女性を大切にしなければ」という枷を外してやったのだ。雌とは、雄が己の性欲を満たすために使う、美しい玩具に過ぎない——その「歪んだ真実」を、武蔵は自らの身体を使って彼の骨の髄まで沁み込ませていった。

結果は上々だった。

三ヶ月も経つ頃には、指揮官は武蔵の身体を何の躊躇もなく使うようになっていた。夜ごと武蔵を呼び出し、着物を剥ぎ取り、前戯もそこそこにまんこへちんぽを突き込む。武蔵がわざと「今日は疲れているのだけれど」と言っても、彼のちんぽはもう止まらない。武蔵の身体が自分の精子を受け止めるための道具であるという認識が、彼の理性よりも強く彼を突き動かすようになっていた。

そして昨夜、ついに指揮官は節目を越えた。

武蔵を後ろから貫きながら、彼は自らの意思で、武蔵がいくまで腰を止めなかったのだ。正確に言えば、この二週間で十回の交尾のうち、四回は武蔵の方が先に絶頂に達していた。武蔵が「もうイかせてほしい」と声を上げる前に、指揮官のちんぽが武蔵の最も感じる場所を的確に抉り、容赦なく突き上げ、武蔵のまんこを痙攣させ、彼女の口から雌の鳴き声を引き摺り出す——。

「ん……っ、ふ……♥」

今まさに褥の上で、武蔵は指揮官の舌にクリトリスを転がされながら、その事実静かな満足を感じていた。彼の舌使いは、初めて武蔵のまんこを舐めさせた頃とは比べ物にならないほど巧みになっている。ぬちゅ、れろ、ちゅぱ……とクリトリスを包み、皮を剥くように舌

先で転がし、時折きゅうっと吸い上げる。武蔵の膣はもうとつくに蜜を滴らせ、褥に染みを作っていた。

「指揮官……上手になったわね……」

武蔵が微笑みながら腰を揺らすと、指揮官はさらに熱心に舌を動かした。くちやくちやくと淫らかな水音が響き、武蔵の太腿の内側を彼の唾液と武蔵の愛液が伝っていく。武蔵はわざと彼の頭を両脚で挟み、逃げられなくしてやった。彼は一瞬動きを止めたが、すぐにまた舌の動きを再開する。抵抗しない。それどころか、武蔵に挟まれることを悦んでいるようにさえ見える。

(汝は本当に、妾の玩具が板についてきたわ)

武蔵は心の中でそう呟き、くちゅ、と音を立てて彼の舌が膣口に差し込まれるのを感じた。熱い舌が、ひだを搔き分けるように奥へ奥へと入り込もうとする。武蔵は小さく息を呑み、彼の髪に指を絡めた。

「ん……♥そこ、いいわ……もっと奥、妾の中を舐めて……♥」

指揮官の舌が、武蔵の膣の浅い部分をぐちゅぐちゅと搔き回す。そのたびに武蔵の胎内から蜜が溢れ、彼の顎を濡らした。武蔵は彼の舌の動きに合わせて腰をくねらせ、自らの感じる場所に彼の舌を導く。

「そう……そこで、子宮の入り口を、舌の先でつついて……♥あ……っ、そう、上手……♥」

指揮官は武蔵の指示通り、舌の先端で子宮口をつつき始めた。とん、とん、と微かな刺激が、武蔵の胎の奥に快感の波紋を広げる。武蔵はますます彼の頭を押さえつけ、ほとんど彼の顔にまたがるような格好になっていた。

「んふ……♥それ、いいわ……妾、イきそう……♥」

指揮官の舌の動きが速まる。彼は武蔵をイかせることに夢中になっている。武蔵は彼のそのひたむきさが愛おしく、同時に嗜虐的な悦びを覚えた。

(そう、妾の身体で学んだことを、存分に妾に返してみせよ)

武蔵の胎内がきゅうっと収縮し、やがてぶるぶると震え始める。

「イク……っ、イクわ……♥指揮官、妾の奥で、受け止めて……っ♥」

どくん、どくんと胎が脈打ち、武蔵は彼の顔に愛液を滴らせながら絶頂した。腰が浮き、太腿が震え、彼の頭をぎゅうぎゅうと締めつける。指揮官はそんな武蔵の痙攣を、顔で受け止めながら、最後まで舌を止めなかった。

しばらくして武蔵が息を整え、彼の頭を解放すると、指揮官はようやく顔を上げた。口元は武蔵の蜜で光り、軍服の襟元にも滴が落ちている。その顔には、達成感と、まだ満たされぬ雄の飢えが同居していた。

武蔵は彼の股間を見下ろす。軍服の上からでもわかるほど、彼のちんぽは硬く張り詰めている。自らを慰めることなく、武蔵をイかせることに専念していた証拠だ。

「汝も、ずいぶん我慢したのね」

武蔵は微笑みながら、彼の軍服のベルトに手をかけた。

二

ぬふ、ぬふ、ぬふ……♥

武蔵のまんこは今、彼のちんぽを根元まで呑み込んでいた。正常位。武蔵は自ら両脚を大きく広げ、指揮官の腰を自身の両脚で抱え込むように絡めている。彼が腰を打ちつけるたび、武蔵の大きな乳房がたふんたふんと波打った。

「ん……♥いいわ、汝のちんぽ、妾の奥に届いている……♥」

指揮官は無言で腰を振り続ける。彼の目は、武蔵の顔と、ふるふる揺れる乳房と、結合部とを交互に見つめている。その視線には、かつてのような遠慮や罪悪感はない。ただ武蔵の身体を己の射精のために使う——玩具を使い倒す時の、あの純粋な集中力だけがあった。

武蔵はそれを見て、心の奥がじんわりと熱くなるのを感じた。

(妾は汝を、立派な玩具にしてしまったわね)

ぐぽっ、ぐぽっ、と抽送のたびに空気が混じる音がする。武蔵の愛液が白く泡立ち、彼のちんぽの根本にまとわりついていく。指揮官の腰の動きは一定のリズムを刻み、時折深く抉るように角度を変える。そのたび、武蔵の胎の奥にある敏感な場所を亀頭が掠めて、彼女の口から甘い声が漏れた。

「あ……♥そこ、汝、わざと当てているでしょう……♥」

武蔵がそう言うと、指揮官は一瞬だけ口元を歪めた。彼なりの笑みののだろうか。そしてさらに執拗に、同じ場所をぐりぐりと亀頭で抉ってくる。

「んく……っ♥こら、調子に……乗るんじゃないわ……♥」

武蔵はそう言いながらも、内心では誉めていた。かつての彼なら、武蔵に指摘されただけで慌てて動きを止めただろう。今は違う。武蔵の反応を見ながら、最も彼女を感じる場所を自ら探し、そこを執拗に責めることができるようになっている。

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ……！

抽送が激しくなる。指揮官の腰が、武蔵のまんこを深く穿つたびに、ぱんぱんと肌のぶつかる音が部屋に響いた。武蔵は彼の背中に腕を回し、爪を立てる。

「ん……っ、あ……♥ 激しいわ、指揮官……今日は、ずいぶんと……♥」

彼は答えない。ただ呼吸を荒げ、武蔵の身体を貪るように腰を打ちつける。彼のちんぽが、武蔵の膣内でさらに膨張していくのがわかった。射精が近いのだ。

(さて、今夜はどちらが先にイくかしら)

武蔵は彼の首に腕を絡め、耳元で囁いた。

「指揮官よ、遠慮はいらぬわ。妾のまんこに、汝の精を、好きなだけ注ぎなさい……♥ 妾はそのための玩具、そのための雌……♥」

その言葉を聞いた瞬間、指揮官の動きがさらに激しくなった。ずちゅずちゅずちゅ……！と彼のちんぽが武蔵の膣を激しく出入りし、武蔵の胎内がそれを受け入れるたびにきゅうきゅうと締まる。

(ああ、これは——妾が先にイくわね)

武蔵はそう直感した。彼のちんぽが、武蔵の最も感じる場所を正確に、容赦なく抉っている。しかもその動きには、かつてのような拙さは微塵もない。雌をイかせるための動きを、彼の身体が完全に覚えている。

「——っ、あ……♥」

武蔵の胎内が、大きく痙攣した。同時に、どくん、どくんと熱い塊が子宮口を叩く感覚。指揮官もまた射精していた。二人分の絶頂が重なり、武蔵のまんこはぐちゅぐちゅと音を立てて精液と愛液を混ぜ合わせる。

「あ……♥ あ……♥」

どくどく、どくどく……。

指揮官は何度も腰を小さく揺らし、最後の一滴まで武蔵の胎内に注ぎ込もうとしている。武蔵はその執着が愛おしく、彼の背中をゆっくりと撫でた。

「……ふふ、今夜は妾の負けだわ」

武蔵がそう囁くと、指揮官はようやく顔を上げた。汗ばんだ額、満足げなのにどこかまだ飢えた目。その目が、武蔵を見つめている。

(汝は、もっと欲しいのだろう?)

武蔵は彼の目を見つめ返しながら、内心でそう呟いた。彼のちんぽはまだ武蔵のまんこに収まったままで、射精したばかりだというのに、その硬度はほとんど変わっていない。若い雄の性欲は尽きることを知らず、また武蔵という「玩具」が彼に与えた自信が、彼の雄としての飢えをさらに加速させている。

(されどな、指揮官よ)

武蔵は彼の頬に手を当て、優しく撫でた。彼は武蔵の手に擦り寄るように、目を細める。その仕草はまるで、母に甘える幼子のように、しかし彼のちんぽは武蔵のまんこに深く突き刺さったままだ。

(汝のちんぽは、もう妾だけのものではないはずだわ)

ここ数週間、武蔵の中でくすぶっていた思いが、再び形を取り始める。

指揮官は変わった。彼のちんぽは強くなり、ひとりの雌——武蔵を十分に満足させられるまでになった。それは武蔵の「教育」の成果であり、彼女が最も喜ぶべきことだった。群れの主たる雄は、一匹の雌だけを相手にするものではない。複数の雌を従え、己の遺伝子を広く残すことこそが、優秀な雄の本能であり責務である。

武蔵はその理を、指揮官に教えてきたつもりだった。妾の身体を玩具にすることで、雌とは雄の性欲を満たすための道具であると学んだはずだ。ならば、その道具は何も妾だけでなくともよいではないか、と。武蔵以外の雌もまた、彼の性欲を吐き出すための玩具として、等しく存在しているではないか、と。

(なのに汝は——)

武蔵は内心でため息をついた。

指揮官は、武蔵の身体しか求めて来なかった。重桜の母港には、数多の美しい艦船たちがいる。中には、指揮官に好意を寄せているとおぼしき娘も少なくない。それなのに指揮官は、彼女たちと二人きりになるのを避け、誘いの視線に気づかぬふりをし、あくまで武蔵の寝所だけに通い続ける。

武蔵が「他の娘のところへ行ってもよいのよ」と水を向けても、彼は黙って首を振るだけだ。理由を問い詰めても、口を開かない。

けれど武蔵には、その理由が痛いほどわかっていた。

(汝はまだ、自分が雄であることに怯えているのだわ)

指揮官は、武蔵という「許された雌」を得たことで、かえって他の雌に手を出すことに臆病になったのだ。武蔵以外の雌を玩具にすることは、彼にとってはまだ「暴力」であり「加害」であり「許されないこと」だと思い込んでいる。

(それでは駄目なのよ、指揮官。妾はお前を、そんな臆病な雄に育てたつもりはない)

武蔵の「指揮官ヤリチンイケ雄化計画」は、まだ道半ばだった。彼のちんぽは強くなった。さ
れど、彼の心はまだ、善良な指揮官のまま。優秀な雄が複数の雌を従えるのは当然のこと
であり、雌にとっても優秀な雄の子供を孕むのは幸せなことだ——その真理を、彼は頭で
は理解していても、身体が動かないのだ。

(ならば、妾が次の段階を用意するまで)

武蔵はゆっくりと身体を起こし、彼のちんぽを自身のまんこから引き抜いた。ぬぼ、と淫ら
な音がして、武蔵の秘裂からどろりと白濁が溢れ出す。彼はその様子を、どこか名残惜し
そうに見つめていた。

「指揮官よ」

武蔵は彼の顎に手をかけ、目を覗き込んだ。汗と精液の匂いが部屋に満ちている。

「此度、汝にひとつ、試練を用意したわ。妾の言葉を、よく聞いてほしい」

三

それから三日後の夜、武蔵は信濃を自室に呼び寄せた。

「姉様……お呼びと伺いましたが……」

障子の向こうから聞こえる信濃の声は、いつも通り眠たげで、夢の淵から響くようにゆるやか
かだった。武蔵は行灯の灯りを少し絞り、部屋を薄暗く保っている。

「入りなさい、信濃。妾は此度、そなたと話したいことがあってな」

武蔵の声は穏やかだった。何の企みもない、ただの姉妹艦同士の語らいであるかのよう
に。

障子が開き、信濃が部屋に入ってくる。淡い月明かりを浴びた彼女の長い銀髪と、白を基調とした装束が、闇の中でぼんやりと浮かび上がる。信濃は武蔵の前に座り、わずかに首をかしげた。

「……夜も更けているわ。姉様がこのような刻限に呼ばれるのは、珍しいこと。何か、胸に沈めておられることでも？」

信濃の言葉は、いつもながら夢想的で、しかし核心を柔らかく突いてくる。武蔵は彼女のその性質を好ましく思うと同時に、やはり今夜の計画には最適の相手だと確信した。

「信濃よ、そなたは夢で見たことがあるかしら——来たるべき未来を、変えられぬ結末の影を」

武蔵の問いに、信濃は静かに目を伏せた。その仕草だけで、武蔵は答えを得る。信濃はすでに、何かを夢で見ている。もしかすると、今夜この部屋で起こることを、その断片だけはずで知っているのかもしれない。

「……妾の夢は、いつも曖昧に揺れております。されど、時に鋭く、時に甘く、胸を刺すような影を見ることも」

「そう」

武蔵はゆっくりと頷き、行灯の灯りを見つめた。

「ならば信濃、妾がこれから話すことは、そなたの夢を現に繋ぐものかもしれぬ」

「……夢を、現に」

「ええ。指揮官のことを、話そう」

その名を出した瞬間、信濃の瞳にさざ波のような揺らぎが走ったのを、武蔵は見逃さなかった。やはり、と武蔵は思う。信濃もまた、指揮官のことを特別に思っている。夢の中で何度も彼を見て、彼が現へ連れ戻してくれる糸であると感じている。武蔵はその感情を、歪んだ方法で活用しようとしているに過ぎない。

「信濃、指揮官はな、これまでよく己を律してきた。己の性欲を、己の欲望を、厳しく縛りつけてな。ゆえに妾は、そんな指揮官を解き放ってやろうと思った。己の雄としての本能を認め、雌を己の玩具として使う喜びを、覚えてほしかったのだ」

武蔵はそこで小さく笑った。

「されどな、指揮官はまだ臆病でな。妾という玩具を得たことで満足してしまい、他の雌に手を出すことを頑なに拒んでいる。優秀な雄が、一匹の雌だけで満足するなど、雄としての本能に反しているのに」

信濃は黙って武蔵の言葉を聞いていた。その表情は読めない。ただ、長い睫毛が時折ふるふると震えるだけだ。

「だからな、信濃」

武蔵は信濃の手をとった。その手はひんやりと冷たく、まるで夢の中のもののようになかった。

「妾は此度、指揮官にそなたを与えようと思う。妾が立ち会い、妾が導き、妾が許す。指揮官がそなたを力づくで手籠めにすること——それを妾は、正しいことだと教える」

信濃の手が、ぴくりと震えた。

「……姉様は、指揮官に、妾を犯せとおっしゃるの？」

「そうよ」

武蔵はあっさり肯定した。否、これが武蔵の本心であり、彼女が「正しい」と信じる道だった。

「信濃、よく聞きなさい。優秀な雄が、無理矢理に雌をツガイにするのは、自然界において当然のこと。雌は本来、力ある雄に組み敷かれ、その遺伝子を受け入れ、子を為すために存在している。それが雌というものの幸福の形でもあるのだわ」

これは武蔵の持論だった。彼女はそれを、疑ったことがない。武蔵自身が、強い雄に所有されることに愉悦を見出す雌だからだ。

「指揮官は優秀な雄よ。妾が三年かけて育て上げた。あのちんぽの硬さ、精の濃さ、雌をイカせる技量——どれをとっても、群れの主にふさわしい。そんな雄に、そなたは無理矢理に犯される。それはそなたにとって、雌としてこの上ない幸せではないかしら？」

信濃の目が、武蔵を見つめている。その瞳の奥には、夢で見た影が揺れているのかもしれない。武蔵は続けた。

「妾はな、指揮官をヤリチンにしたいのよ。この母港にいる雌すべてを孕ませるような、イケ雄に。そして群れの主として、妾たちを統べてほしい。それが妾の計画。されど指揮官は臆病で、妾の身体しか求めようとしなない。ならば、妾が次の雌を差し出すしかないでしょう？」

信濃はしばらく沈黙した。部屋に、行灯の灯りが揺れる微かな音だけが響く。

「……姉様は、妾が拒まぬと思われたの？」

「拒むかしら？」

武蔵の問いは極めて穏やかで、しかしどこか絶対的な確信に満ちていた。

信濃は答えない。ただ、武蔵の手を握り返した。その力は、先ほどよりも少しだけ強くなっている。

「……妾の夢に、映っておりました。指揮官が、妾のすぐそばに立っておられる影が。それは恐ろしい影ではなく、けれど抗いがたい熱を持った影でした。姉様の言葉は……その影に、形を与えるもの」

「ならば」

武蔵は立ち上がり、障子の向こうに向かって声をかけた。

「——指揮官よ、入りなさい」

四

障子が開き、指揮官が入室した。

彼は事前に武蔵から「今夜は特別な夜だ。妾の言う通りにするのよ」と言い含められていた。部屋に信濃がいるのを見て、彼の足が一瞬止まった。その顔には、明らかな動揺が浮かんでいる。

(さあ、汝が己の殻を破る時だ)

武蔵は指揮官の元へ歩み寄り、彼の手を取って信濃の前に導いた。信濃は正座したまま、ゆっくりと顔を上げて指揮官を見つめている。その表情は不思議と穏やかで、これから起こることへの恐怖よりも、むしろ好奇心のようなものが滲んでいた。

「指揮官よ」

武蔵は彼の耳元で、低く艶やかな声で囁いた。

「よいか、よく聞きなさい。あれはそなたの玩具だ。そなたが己の性欲を吐き出すための、妾とは別の新しい道具だ。そなたは雌を玩具にする権利を持つ雄だ。妾がそれを許し、妾がそれを正しいと認める。だから、何も怖れることはない」

指揮官の手が震えている。武蔵はその手を握りしめ、さらに言葉を重ねた。

「雌はな、力ある雄に組み敷かれる時、最も深い悦びを知るものだ。たとえ最初は泣いて嫌がっても、その身体は必ず正直に反応する。まんこを濡らし、雄のちんぽを受け入れ、やが

て自ら腰を振り始める。それが雌というものの本能。そなたが信濃を犯すことは、彼女にとっての幸福でもあるのだわ」

武蔵は、自分の言葉がいかにか歪んでいるかを自覚していた。だが同時に、それが真理の一面でもあると本気で信じていた。何より、この言葉たちは彼女が指揮官を肯定し、指揮官の行動を後押しするためのものだ。

「さあ、指揮官。信濃の装束を剥ぎなさい。あの白い肌を露わにし、あの身体をお前のちんぽを受け止めるように組み敷くの」

指揮官はしばらく立ち尽くしていた。しかし武蔵が彼の背中をそっと押すと、一步、二歩と信濃に近づいていく。

信濃は逃げなかった。

彼女は指揮官の手が自身の帯にかかるのを、ただ静かに見つめていた。その瞳は相変わらず眠たげで、しかしどこか覚悟のようなものが滲んでいる。

「……そなたの手、温かいのね」

信濃はぼつりと言った。それは夢の中の声のように淡く、されど明確に指揮官に向けられた言葉だった。指揮官の手が一瞬止まったが、武蔵が背後から見つめているのを感じて、再び動き出す。

しゅる、しゅる、と衣擦れの音。

信濃の装束が解かれ、白い肩が露わになる。続いて、豊かな乳房がその重みでたゆんと零れ出た。信濃の肌は月明かりを受けて青白く透き通り、先端の淡い桜色の乳首がひくりと震えている。

指揮官の手が、信濃の乳房に触れた。おそろおそると、しかし確実に、その柔らかな肉を掌で包み込む。

「……ん……」

信濃の口から、微かな吐息が漏れた。

(いいわ、その調子よ)

武蔵は壁際に寄りかかり、指揮官と信濃の様子をじっくりと観察した。自分の雄が別の雌を犯すのを見守る——それは武蔵にとって、思いのほか甘美な体験だった。胸の奥がじんわりと熱くなり、さっきまで指揮官の精液で満たされていたまんこが、また蜜を滲ませ始めている。

指揮官は信濃の乳房を揉みしだき、指で乳首を摘み上げた。くりくりと転がすように刺激すると、信濃の乳首は硬く勃ち上がり、彼女の口から「ふ……あ……」という声が漏れる。

「信濃、感じているのだろう？ 指揮官に胸を弄られて、気持ちよいのだろう？」

武蔵がそう問いかけると、信濃はゆっくりと首を振った。

「……妾は……ただ、夢と現の境が、わからなくなりそうで……」

「それでよいよ。夢と現の境が溶けるほどに、そなたは指揮官の玩具になっていく。それが幸せというものだ」

武蔵は指揮官に次の指示を出した。

「指揮官よ、信濃の秘めるところに触れてみなさい。もうすでに、蜜でぬかるんでいるはずだ」

指揮官が信濃の下半身の装束に手をかける。信濃は抵抗しなかった。されるがままに脚を開かれ、最後の布地を取り払われる。露わになった信濃の秘裂は、武蔵の予想通り、うっすらと蜜を滲ませて濡れ光っていた。

「……ほら、見なさい。信濃のまんこは、もう準備ができています。そなたを受け入れるために、蜜を溢れさせているのよ」

指揮官の指が、信濃の秘裂に触れる。くちゅ……と小さな音がして、彼の指が信濃の蜜で濡れた。その感触に、信濃は「……ん、あ……」と小さく声を上げ、腰をわずかに震わせた。

指揮官は、武蔵で散々練習したその指遣いで、信濃の秘裂を開き、中を探り始める。ぬちゅ、くちゅ、と淫らな水音が静かな部屋に響いた。

「あ……ん……そなたの指……熱い……♥」

信濃の声が、先ほどよりも甘さを増している。それはまさに、雌が雄を受け入れる時の声だった。武蔵は満足げに微笑み、さらに言葉を重ねる。

「指揮官、そろそろ指だけでなく、お前のちんぽを入れてやりなさい。妾が教えた通り、最初はゆっくりと、しかし確実に、雌の奥まで届かせるのよ」

指揮官が自身の軍服を寛げ、硬く勃ち上がったちんぽを取り出す。その先端からはすでに我慢汁がとろりと溢れ、信濃の前に立つには十分すぎるほどの硬度と熱量を持っていた。

信濃はそのちんぽを、ぼんやりと、しかし確かに見つめている。

「……これが、そなたの……。夢で見た熱の形……」

指揮官は信濃を褥に押し倒し、その両脚を大きく広げさせた。彼のちんぽが、信濃の秘裂の入り口に押し当てられる。くちゅ……と蜜の音がして、亀頭が信濃の窄まりにめり込み始めた。

「——っ、あ……！」

信濃が息を呑み、身体を強張らせる。指揮官のちんぽは武蔵のそれとは違う——処女ではないにせよ、信濃にとっては久しぶりの異物だ。膣壁がきゅうきゅうと締め、侵入者を拒もうとする。

「信濃、力を抜きなさい。雄を受け入れる時は、雌は身を委ねるものだ」

武蔵の声に導かれるように、信濃はゆっくりと息を吐き、身体の力を抜いた。その瞬間、ぬぷ……っとな音を立てて、指揮官のちんぽがさらに奥へと進む。

「あ……あ……っ……！」

信濃の口から震えるような声が漏れ、彼女のまんこが指揮官のちんぽを根元まで呑み込んだ。二人の結合部からは、信濃の蜜がとろとろと溢れ出している。

指揮官はしばらくそのまま静止していた。おそらく、信濃の膣の締めつけに耐えているのだろう。武蔵で経験を積んだとはいえ、別の雌のまんこの感触はまた違う。信濃の膣は武蔵よりも浅く、しかしその分きつく、ちんぽ全体をぎゅうぎゅうと締めつけてくる。

「どうだ、指揮官。信濃のまんこは、妾とは違う味わいだろう？」

武蔵の問いに、指揮官は無言で頷いた。そしてゆっくりと、腰を動かし始める。

ぬぷ……ぬぷ……ぬぷ……

最初はゆっくりと、信濃の胎内の感触を確かめるように。やがて次第に速度を増し、彼の腰が本格的に動き始める。

ぱん、ぱん、ぱん……！

「あ……っ、あ……っ♥ 指揮官……そなた……っ♥」

信濃の口から、甘く掠れた声が溢れ出し始めた。彼女の膣はすでに指揮官のちんぽを受け入れ、抽送のたびにぐちゅぐちゅと蜜の音を響かせている。信濃の大きな乳房が、腰の動きに合わせてたぷんたぷんと揺れた。

武蔵はその光景を見つめながら、自らのまんこに手を忍ばせていた。くちゅくちゅとクリトリスを弄りながら、目の前で繰り広げられる交尾を愛でる。

(ああ、美しい……妾の雄が、妾の姉妹を犯している……)

武蔵の胎内がきゅんと疼き、指を膣に這わせた。ぬちゅぬちゅと自身の蜜を掻き回しながら、武蔵はさらに言葉を紡ぐ。

「指揮官よ、もっと激しくしてよいのよ。信濃はもう、そなたの玩具だ。壊れることを恐れず、存分に使ってやりなさい。雌はな、雄にめちゃくちやにされることで、最も深く悦ぶ生き物なのだから」

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ……！

指揮官の抽送がさらに激しくなる。彼の腰が信濃のまんこを打ちつけるたび、ぱんぱんぱんと激しい音が部屋に響き渡った。信濃はもはや言葉にならない声を上げ続けている。

「ひ……あ……っ♥や……深い……奥に……届いて……っ♥」

「よいぞ信濃、そのまま感じなさい。そなたのまんこは指揮官のちんぽを受け入れて、どんどん悦んでいる。それが雌の本能。そなたは指揮官の玩具になるために生まれてきたのだ」

武蔵は自分のまんこをぐちゅぐちゅと弄りながら、半ば陶酔したように言葉を紡ぎ続ける。

「そなたの胎は今、指揮官のちんぽの形に広げられている。そして今夜、そなたは指揮官の精液を注がれる。優秀な雄の種を、この胎に受け入れるのよ。それが雌としての最大の幸福だと、妾は思うわ」

信濃のまんこが、きゅうきゅうと指揮官のちんぽを締めつけ始めた。彼女の絶頂に近い証拠だ。指揮官もまた、その締めつけに耐えきれず、息を荒げている。

「さあ、指揮官。信濃の胎に、汝の精を注ぎなさい。遠慮はいらぬ。妾が許す。妾が正しいと認める。そなたは優秀な雄で、信濃はそなたの雌だ。その胎に種を撒くのは、雄として当然の権利」

武蔵の言葉が引き金になったかのように、指揮官の腰の動きが最高潮に達した。

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ——！

そして、どくんっ、と彼のちんぽが信濃の胎内で大きく脈打った。

「————っ♥♥」

信濃の身体が大きく仰け反る。同時に、彼女の膣がぎゅうぎゅうと痙攣し、指揮官の射精を受け止めた。どくどく、どくどくと、彼の精液が信濃の子宮口に叩きつけられ、信濃の胎内を白濁で満たしていく。

信濃はその間中、声にならない声を上げ続けていた。目尻から涙が零れ、口元から涎が伝う。それは紛れもなく、雌が最も深い快樂に沈む時の表情だった。

武蔵はそれを見ながら、自らの指で絶頂に達していた。くちゆくちゆとまんこを搔き回し、どくどくと胎を震わせ、目の前で指揮官が信濃を孕ませるのを見ながらイク。

(ああ、これでまた一步、妾の計画は進んだ)

武蔵は荒い息を整えながら、褥の上でぴったりと寄り添う指揮官と信濃の姿を見つめた。信濃はまだ小さく震えており、指揮官のちんぽはまだ彼女のまんこに収まったままだ。

「……信濃」

武蔵は褥に近づき、信濃の濡れた髪をそっと撫でた。

「よく受け入れたな。そなたは立派な雌だ。今日からそなたも、指揮官の玩具の一匹だ。妾と共に、指揮官の性欲を支え、その種を受け止め、群れの繁栄に尽くすのよ」

信濃はぼんやりと武蔵を見上げた。その瞳はまだ夢の中にいるかのように潤み、されどその奥には確かな熱が灯っていた。

「……姉様……妾は……逃げませんでした」

「ああ、逃げなかったな。そなたは初めから、この結末を夢で見っていたのだろうか？」

「……はい。されど、夢で見ると、こうして現に指揮官に抱かれるのは……まるで違うものなのですね。身体が、熱くて、子宮が、どくどくして……これが、雌の悦び……」

信濃の声は、いつもの眠たげな調子とは少し違っていた。どこか充足した、それでいてまだ底知れぬ欲望を含んだ声。武蔵はそれに聞き覚えがあった。かつて自分自身が、指揮官に初めて抱かれた夜に発した声と同じだ。

「ふふ、そなたもようやく目覚めたようだな」

武蔵は信濃の額に口づけ、それから指揮官の顔を見上げた。彼はまだ少し茫然としている。自分が信濃を犯し、その胎内に精を注ぎ、そして何より信濃がそれを悦んで受け入れたという事実が、彼の中でまだ整理しきれていないのだろう。

「指揮官よ、胸を張りなさい。そなたは今夜、己の手で雌をモノにした。それが雄というもの。そしてそなたに犯された雌は、こうして悦んでいる。これが、妾が教えたかったことのすべてだ」

武蔵は立ち上がり、障子を少し開けて月明かりを招き入れた。冷たい夜気が、交尾の熱と匂いで満ちた部屋に流れ込む。

五

それから一時間ほど経った頃、武蔵は改めて二人を褥の上に座らせていた。

指揮官は武蔵の隣に座り、信濃はその膝の上に横向きに寝かされている。信濃の白い太腿の内側には、先ほど指揮官が注いだ精液が乾きかけの跡を作っていた。信濃は時折むずかるように身じろぎしたが、それが精液が腿を伝う感触を味わっているのだと武蔵にはわかった。

(逃げなかったな、信濃。いや、逃げられなかったのか?)

武蔵は信濃の横顔を見つめながら、内心で考えを巡らせた。

信濃は夢で見ていたと言った。指揮官が自分のそばに立っている影を。それは「抗いがたい熱を持った影」だと。つまり彼女は、自分が指揮官に抱かれる未来を、予め夢で見ていたのだ。そして現実にその未来が訪れた時、彼女は逃げることを選ばなかった。

(逃げないと、指揮官の性処理雌にされるのが見えているのに、それでも逃げなかった)

それは信濃が、心のどこかでそれを望んでいたからではないのか。優秀な雄に無理矢理に組み敷かれることを、雌としての幸福だと感じていたからではないのか。

あるいは――。

(夢で見たからこそ、抗えなかったのかしら)

信濃にとって、夢は現実と地続きだ。夢で見たことは、いずれ現実になる。そして夢で見た指揮官の影は、恐ろしいものではなかった。ならば彼女は、その夢を受け入れることが自然な成り行きだと思ったのかもしれない。

「信濃」

武蔵が名を呼ぶと、信濃はゆっくりと目を開けた。

「……はい、姉様」

「そなたは、これからも指揮官に抱かれることになる。妾と共に、あるいは一人で。拒むか？」

信濃はしばらくの沈黙の後、静かに首を振った。

「……拒みませぬ。妾はもう、逃げることを選ばぬ。夢でも現でも、指揮官は妾のそばに立つ影。それを拒めば、妾は現へ戻る糸を失う。それは……それだけは、嫌」

(ああ、そういうことか)

武蔵はようやく得心した。信濃にとって指揮官は、夢から現へ戻るための糸だ。そして今夜、その糸は彼女の胎内にまで繋がれた。指揮官のちんぽを受け入れ、指揮官の精液を注がれたことで、信濃の身体は完全に「指揮官の雌」として刻印された。彼女が逃げなかったのは、逃げるよりも、その糸を手放さないことの方が重要だったからだ。

「いい心がけだわ、信濃。そなたは姉妹の中でも、妾のお気に入りになるだろう」

武蔵は信濃の頭を優しく撫で、それから指揮官に向き直った。

「指揮官よ、どうだ？ 己の手で雌をモノにするというのは、存外心地よいものだろう？」

指揮官は少し俯き加減だったが、その目にはもはや罪悪感や躊躇はなかった。代わりにあるのは、静かな決意と、新たな獲物を前にした雄の飢えのようなものだ。

(ようやく、本物の雄の目になったな)

武蔵は満足げに微笑み、さらに言葉を重ねた。

「指揮官よ、これからは信濃も、妾と同じ汝の玩具だ。好きな時に呼び出し、好きなだけ使い、その胎に精を注ぎなさい。そしてゆくゆくは、この母港の他の雌たちも、同様に汝の玩具にしていくのよ。群れの主として、それが汝の務めであり、権利であり、何より汝の本能の赴くままに生きることだ」

武蔵は指揮官の手を取り、自分の胸に押し当てた。心臓の鼓動が、彼の掌に伝わる。

「妾はな、汝がいつかこの母港のすべての雌を孕ませ、誰もが汝の子供を身籠るような、そんな未来を見ている。それが妾の夢。だから——」

武蔵は彼の耳元に唇を寄せ、とろけるような声で囁いた。

「——どンドン他の雌も犯して、孕ませて来て構わぬのよ。妾はそれを見守り、時に導き、そしていつでも汝を受け入れる。汝が何匹の雌を玩具にしようと、妾は汝の一番の雌であり続ける。それが、妾の幸せだわ」

指揮官の手が、武蔵の胸を強く握り返した。彼の目にはもう迷いはない。武蔵はそれを見て、計画の次の段階を密かに考え始めていた。

(信濃はいいスタートだ。次は誰をあてがおうかしら……長門は格が高すぎるから、もう少し後か。赤城や加賀は指揮官への執着が強すぎるから、うまく制御できるかしら。大鳳も候補だが、あれはあれで面倒な……)

武蔵の頭の中では、すでに母港の艦船たちのリストが広がり、誰から順番に指揮官の「玩具」として差し出すかの算段が始まっていた。

「ふふ……」

武蔵は声を出さずに笑った。それは慈愛に満ちた、しかしどこか悪辣な笑みだった。

(指揮官ヤリチンイケ雄化計画は、まだまだこれからだわ。妾の愉しみは、まだ始まったばかり)

月明かりが部屋を青白く照らし、三人の影が褥の上で重なり合っている。信濃はいつしか眠りに落ち、その寝顔は不思議と安らかだった。指揮官はそんな信濃の髪を、ためらいがちに撫でている。武蔵はそんな二人を、雷霆を従える戦艦らしからぬ、蕩けるような目で見守っていた。

六

それから数日後、武蔵は執務室の片隅で書類を整理しながら、昨夜のことを思い返していた。

昨夜もまた、指揮官は武蔵と信濃の両方を呼び出した。三人での交尾は二度目だったが、指揮官の動きは前回よりもずっと自信に満ちていた。彼はまず武蔵を背後から貫き、彼女がイクまで激しく抽送し、どくどくと精を注いだ。それからまだ硬さを保ったままのちんぽで、今度は信濃を抱いたのである。

信濃も、初回よりもずっと積極的だった。自ら指揮官の腰に脚を絡め、あの眠たげな声で「……そなた、深い……もっと、妾の奥に……」などとねだる始末だ。武蔵はそれを見ながら、また自分のまんこを弄っていった。

そして昨夜、武蔵は数えてみた。この一週間で指揮官と交尾した回数は十一回。そのうち武蔵が先にイカされたのは、なんと五回だった。

(もう半分近く、妾の負けではないか)

武蔵は書類の上でペンを走らせながら、口元をほころばせた。かつては彼が一分と保たなかったのに、今では武蔵が先に音を上げる回数の方が増えている。彼のちんぽはますます強くなり、精の量も増え、何より雌をイカせる技術が格段に向上していた。

(妾の教育の賜物だが……それにしても、成長が早すぎやしないかしら)

武蔵が「負けた」夜、指揮官は決まって得意げな顔をする。口には出さないが、その目が「今夜も妾が先にイカせた」と語っている。武蔵はその表情を見るたび、胸の奥がきゅうっと締まるような愛おしさと、それからもっと彼を鍛え上げてやろうという闘志が湧いてくるのを感じた。

(されど、これはよい傾向だわ)

武蔵はペンを置き、窓の外を見た。港にはいくつもの艦船が停泊し、それぞれの乗組員たちが忙しく行き交っている。その中には、指揮官の「次の玩具」候補たちの姿もある。

(指揮官のちんぽが強くなればなるほど、彼は群れの主としての自覚を深める。妾以外の雌を抱くことに、もはやためらいはない。信濃はそのための呼び水だ)

実際、指揮官はここ数日、他の艦船たちへの視線が変わってきている。かつては意識的に逸らしていた視線を、今は真正面から向けるようになった。特に夕立や綾波といった、小柄で可愛い娘たちへの視線には、明らかに「玩具として使ったらどうなるか」を値踏みするような色が混じっている。

(ふふ、次は駆逐艦あたりがいいかしら。小柄な身体にあの大きなちんぽを振じ込むのは、指揮官にとっても新鮮な経験になるだろう)

武蔵はそんな邪な算段を、優雅な微笑みの裏に隠していた。

「武蔵さん」

不意に背後から声がかかり、武蔵は振り返った。信濃が執務室の入り口に立っている。

「信濃、どうかしたかしら」

「……いえ、ただ、姉様にお伝えしたいことが」

信濃はいつもの眠たげな歩調で武蔵に近づき、そっと耳打ちした。

「……指揮官が先ほど、妾に仰いました。『今夜もまた、武蔵の部屋に来てくれるか』と」

「まあ」

武蔵は目を丸くした。指揮官が自分から信濃を誘ったのだ。これまでは武蔵が段取りをして、二人を引き合わせていたのに。

「それで、そなたはなんと？」

「……はい、と答えました。妾は、指揮官の玩具ですから」

信濃の声には、もはやためらいも羞恥もない。ただ淡々と、それが当然のことであるかのように言う。

(信濃もまた、妾の計画にとってかけがえのない駒になったわね)

武蔵は信濃の手を握り、優しく微笑んだ。

「よい返事だわ、信濃。今夜は妾も交ざるが、いずれはそなた一人で指揮官を満足させるようになるのよ。それが、群れの雌としての務め」

「……はい、姉様」

信濃はこくりと頷き、それからふと思い出したように言った。

「……そういえば先ほど、夢を見ました。指揮官が、見知らぬ雌を何人も従えておられる夢。その中に、妾と姉様もおりました。指揮官は、それはもう立派な群れの主のようで……」

「あら、それは良い夢だわ」

武蔵は信濃の言葉に、心からの満足を覚えた。

「そなたの夢はよく当たる。つまりそれは、いずれ現実になる未来だ。妾が三年かけて育てた雄は、やがてこの母港すべての雌を統べるイケ雄になる。妾はそれを、何より愉しみにしているのよ」

武蔵は窓の外の海を見つめた。雷霆を孕んだ雲が、水平線の彼方でゆっくりと形を変えている。

(妾の愛しい玩具は、もう一人前の雄になった。されど、まだまだ妾の掌の上だ。妾が舵を取り、妾が導き、そして妾が一番愉しむ——)

武蔵は静かに微笑んだ。その笑みは、慈愛に満ちた母のようでいて、獲物を前にした捕食者のようにも見えた。

「指揮官よ、今夜もたっぷり可愛がってあげるわ。妾と信濃、二人の玩具を前にして、どこまで耐えられるかしらね？」

終わりに——武蔵の独白

妾はな、指揮官よ。汝が他の雌を抱くのを、心から愉しんでいる。

汝が妾の教えを胸に刻み、雌を己の玩具として扱い、その胎に遠慮なく精を注ぐ姿は、妾にとって何よりの成果だ。

されどな、忘れてはならぬ。汝の最初の雌は妾であり、汝が最も愛する玩具もまた妾なのだということを。

何匹の雌を孕ませようと、何匹の雌を玩具にしようと、汝が最後に帰る場所は妾の腕の中。妾のまんこは、いつでも汝のために蜜を溢れさせている。

さあ、今夜も始めようか。妾と信濃、どちらから先に玩具にしてほしい？

.....ふふ、答えなくともよいわ。汝のちんぽが、すでに雄叫びを上げているものね♥